



# 就職しないで生きるには

斉藤 典貴

1981年6月、弊社から一冊の翻訳書を刊行しました。タイトルは『就職しないで生きるには』。著者のレイモンド・マンガーは、60年代後半にベトナム反戦運動に参加した人で、その後、世界中を放浪するなどして、73年にアメリカのシアトルで小さな出版社兼書店「モンタナ・ブックス」をはじめました。この本は「どんな仕事をするのか、どのように生きていくのか」という問題について、自らの経験をもとに、若い人たちに向けて発信したものです。79年にアメリカで出版されました。

原題は“Cosmic Profit: How to make money without doing time”。直訳すると〈根源的利益——時間をかけずにお金を稼ぐ方法〉ですが、日本版を出版するにあたって、どのようなタイトルにするのか、侃々諤々意見を交わし、大きく頭を悩ませました。会議も煮詰まった頃、当時の社長が「ようするにこれは、就職しないでどうやって生きていくか、という本だね」と一言。それを聞いた編集部の面々が「それだ!」ということになって、『就職しないで生きるには』というタイトルが誕生したのです。



そして編集部ではすぐに、「自分で納得できる暮らしがしたい」との思いで自分の“城”を構えている人たちに目を向けました。その時代、日本でも企業に就職せず、生きていく方法を模索する若い人たちが増えていたからです。そういった読者層をターゲットに「就職しないで生きるには」シリーズは82年5月にスタートしました。そのラインナップは、

- ①『ぼくは本屋のおやじさん』  
早川義夫（川崎「早川書店」）
- ②『包丁一本がんばったんねん!』  
橋本憲一（百万遍「梁山泊」）
- ③『みんな八百屋になーれ』  
長本光男（西荻窪「長本兄弟商会」）
- ④『輸入レコード商売往来』

岩永正敏（青山「パイド・パイパー・ハウス」）

⑤『ふだん着のブティックができた』  
津野いづみ（吉祥寺「タイガーママ」）

⑥『ぼくのペンションは森の中』  
加藤則芳（八ヶ岳「ドンキーハウス」）

⑦『花屋になりたくない花屋です』  
河田はな絵（吉祥寺「4ひきのねこ」）

⑧『がらくた雑貨店は夢宇宙』  
長谷川義太郎（渋谷「文化屋雑貨店」）

⑨『子どもの本屋、全力投球!』  
増田喜昭（四日市「メリーゴーランド」）

⑩『アウトドアショップ風まかせ』  
油井昌由樹（西麻布「スポーツトレイン」）

国がバブル期へと向かう中、あえて就職の道を選ばず、日々の生計を立てながら、自由で楽しめる仕事をしたいと求める人たちを中心に、大きな反響を呼ぶことができました。

いま、あらためて見ると、「輸入レコード店」や「ペンション」など、80年代らしい仕事もありますが、なかには時代を超えて、長く読みつがれるロングセラーとなったものもあります。



シリーズを発刊してから30年が経ちました。その間にITの進化により、私たちの生活環境は大きく変化しました。インターネット、eメール、スマートフォン、電子ブック……そしてさまざまなデジタルコンテンツの誕生により、娯楽の嗜好も30年前とは比べものにならないほど多様になりました。

同時に職種や働き方にも大きな変化が見られるようになりました。街へ出てみると、古くからある職種でも、営業時間、休みなど、自分のルールを守って運営している若い人たちと出会うことができました。丁寧に、気持ちよくマイペースで働く若い人たちの姿はたいへん新鮮なものでした。そして、いまの時代にあった新しいワークスタイルとライフスタ



イルを紹介する21世紀版の「就職しないで生きるには」、その名もずばり「就職しないで生きるには21」シリーズを編んでみようと考えました。

シリーズを考えるにあたって注意したのは、これまでの慣習に則った決まりごとにあまりとらわれないようにしようということです。シリーズというのは第1巻から順番に巻数がついていたり、ブックデザインをすべて揃いのものにしてみたりというのが通常です。しかし、そういった常識的なルールには縛られないようにしました。

ブックデザインは読者の方々に、それぞれ1冊1冊を楽しんでもらえることを考えました。それで、寄藤文平さん、矢萩多間さんのおふたりにデザインを依頼し、本によって変えています。寄藤さんは毎回、まったく違った発想でその本のイメージを具体化してくれます。矢萩さんは人気絵本作家ミロコマチコさんの描き下ろしによる装画を使用し、毎回、こちらの想像を超えた表現をしてくれます。

最初の刊行は、2013年6月、『旗を立てて生きる』（イケダハヤト）。この本はプロブロガーとして活動するイケダハヤトさんが、「不況や低収入が当たり前の時代、お金のために働いても明るい未来は感じられないけど、問題解決のために働くのは楽しい」とデフレネイティブ世代の働き方・生き方を指南した1冊です。80年代には想像もできなかったような現代ならではのテーマからスタートしました。

つづいて出版したのは『荒野の古本屋』（森岡督行）です。著者の森岡さんは東京・茅場町の古いビルの一室で写真集と美術書を扱う古書店を営み、さらに併設したギャラリーが、若いアーティストたちの発表の場として、また幅広い人々の新しい交流の場として注目を集めていました。そこには一般的にイメージするようなかつての古書店の姿はなく、こ

れからの小商いのあり方を予感させるものでした。

森岡さんは現在では、銀座で〈たった1冊だけの本を売る本屋〉を開くなど、つねに斬新でユニークなカルチャーを発信しています。

その後も、『偶然の装丁家』（矢萩多間）、『あしたから出版社』（島田潤一郎）、『小さくて強い農業をつくる』（久松達央）、『プログラミングバカー代』（清水亮、後藤大喜）、『不器用なカレー食堂』（鈴木克明、鈴木有紀）と、これまでに7冊を刊行しています。

そこには、日本の学校になじめず、14歳からインドで暮らし、本づくりの道にたどり着いたブックデザイナーの巻もあれば、吉祥寺でひとり出版社を営む編集者の巻、茨城県土浦でスカイプ、SNSなどを駆使したソーシャル時代の新しい農業を実践する農業者の巻など、さまざまにアイデアを練って、自分の理想とする働き方・生き方を追求している人たちの姿を見ることができます。

シリーズのコンセプトとしては、日本の若い人たちに「自分たちが見ている世界のほかに、こんな働き方・生き方があるんだ」ということを知ってもらうことでした。とくに高校生や大学生の皆さんに読んでもらいたいと思い、読みやすさや手に取りやすさなど、本づくりを考えました。

しかし、私どもの考えを超え、うち3冊は韓国や台湾でも翻訳出版されるなど、日本以外でも読まれています。森岡書店銀座店には、本を読まれた海外からのお客さんもたくさんいらっしゃるとの声を聞き、嬉しく思っています。

これから10年後、20年後、「高校生の時に『就職しないで生きるには』シリーズに出会ったおかげで……」という人に出会えることを祈って、これからも、丁寧に本をつくっていきたいと思っています。

（さいとうのりたか：晶文社）

# 定時制のこと

木下 通子

## 定時制との出会い

この4月に埼玉県立浦和第一女子高校(浦和一女)に転勤しました。浦和一女は、県下でも有数のナンバースクール。将来、医者や研究者、海外で活躍する仕事に就きたいと考える女子が入学してくる学校です。その浦和一女には定時制がありますが、定時制には司書がいません。4月も半ばを過ぎ、新学期の喧騒が少し落ち着いてきたころ、定時制の先生が、「木下さんって、春日部女子高校から転勤してきたんですね? 実は、私の娘が春日部女子高校の出身で。定時制の利用のことで相談があるんですが。」と図書館を訪ねてこられました。

私は定時制のことは何も知らず、先生から何う話とはとても刺激的でした。定時制の先生も授業で図書館を使いたいと思っていること。いままでも図書館で本を借りることはできたけれど、それがうまく機能していないことを伺い、定時制にも図書館としてなにかサービスをしたいという気持ちが、ムクムクと湧き上がってきました。

私はあくまでも全日制の司書なので、まず管理職に定時制へも勤務時間内のできるサービスをしていかと相談しました。本校の管理職は図書館活動や司書の仕事にとっても理解があり、できる範囲で無理せずにと許可をいただけただので、それから少しずつ取り組みを始めました。

## 利用登録と図書館オリエンテーション

まず、最初に行ったのは、定時制の生徒と先生方の利用者登録です。定時制は1~4年生までの生徒の在籍数が56名。常勤の先生は10名程度です。前年度まではノートに記入する形で貸出をしていましたが、プライバシーへの配慮を考え、図書館システムに利用者登録を行い、全日制と同じようにパソコンで貸出ができるようにしました。全日制は一人一人が利用者カードを持つ形をとっていますが、定時制は学年ごとにバーコードを打ち出し、ファイルにまとめ、授業で利用する際にも先生にサポートし

ていただきながら、セルフサービスで本を借りられるようにしました。

パソコンにデータを登録したことで、定時制の生徒も予約対応ができるようになりました。流行りの本は定時制の生徒も気軽に予約しています。

次に定時制の管理職と相談をし、定時制の先生に向けて、図書館のオリエンテーションをしました。貸出をパソコンでできるようにしたこと。先生方の勤務時間は12:45~なので、私の勤務時間内でも全日制と同じようなサービスができること。教材研究に必要な資料も提供できるし、本がない場合は他館から本を取り寄せなど相互貸借もできるので、お気軽にご利用くださいとお話ししました。その際に、先生方から生徒にもオリエンテーションをしてもらえないかご提案があり、生徒にも授業時間を使ってオリエンテーションをさせていただきました。さっそく借りてくれる生徒もいて、とてもうれしかったです。

## 全日制との交流

浦和一女の図書館は予算も潤沢で、年間、2000冊ほどの本を購入しています。私は入った本をすべてお知らせしたいと新着案内をこまめに出しているため、その案内や生徒図書委員が作っている「図書館だより」を定時制にも配るようになりました。新着案内を配布したら、それを見て本を借りに来る生徒も出てきました。4月~9月までの半年間で、定時制の生徒の貸出が303冊。定時制の先生への貸出が159冊ありました。

定時制の生徒の授業開始は17:25~なのですが、生徒は17:00~は給食を食べることになっています。そして、15:00~は学習サポートという形の勉強会も行われています。その学習サポートに出る前にちょっと図書館に来て、本を借りていく子。学習サポートにはいかないけれど、早めに学校に来て図書館に寄って行く子が少しずつ増えて、いまは、1、2年生を中心に常連さんが5~6人いるでしょうか。生徒は15:00くらいから図書館に来るようになりました。そして、私ともおしゃべりが弾むようになり、「〇〇を読み終わったんだけど、次におすすめの本ありますか?」など、聞か

れるようになりました。授業前に図書館で勉強してから授業に向かう生徒も出てくるようになりました。放課後、図書館で全日制と定時制の生徒が一緒に過ごしている姿はとても素敵です。

生徒図書委員が発行している月一回の「図書館だより」でも、全日制の生徒が定時制の先生にインタビューを行いました。定時制の先生から、生徒へのオススメ本を紹介していただき、全日制にも定時制にも配布しました。定時制の先生からも全日制との距離が少し縮まったと言っていました。また、7月に行った図書委員会主催のビブリオバトルに定時制の生徒と先生が参加してくれました。こうして「本」をご縁に全日制と定時制の生徒が交流できる場が少しずつ広がっています。

定時制を卒業して、専門学校や大学に進学をする生徒もいます。保育士を目指している生徒から読み聞かせの指導をしてくれませんか？と担任の先生から頼まれ、対応させていただきました。

### 定時制にも学校司書を！

埼玉県には定時制・通信制の高校が24校あります。ほとんどが共学ですが、浦和一女はその中で唯一の女子校です。定時制に通う方にはお子さんを育て上げて自分も学びたいと通われる方もいらっしゃいますが、経済的な事情やご本人の事情で定時制を選んで進学してくる現役生もいます。そして、この

ところ増えてきているのが、母国語を日本語としない外国籍の方だそうです。先日、定時制の先生方の授業研修会に参加させていただき、日本語がわからない方への授業のご苦労話を聞きました。先生方は一人一教科で4学年の学びを支えなければならず、また、高校入学時までの勉強の理解度もとても差があるため、一人一人に対応していくことがとても大変だとおっしゃっていました。私が定時制の司書ならば、図書館でもなにかできることがあるかもしれません。

同じ学校の中に、超進学校の学びと、学ぶことが苦しい子ども達を支える学びが混在している。私は着任したばかりで、まだまだ知らないことが多く、先生方にも質問ばかりしています。そして、不適切な言葉かもしれませんが、今、そのギャップをとっても楽しんでいきます。

私は学校図書館も図書館である、という理念のもと、図書館活動を創っています。生涯に渡って図書館を活用する。好奇心を持って、自ら学ぶことを楽しめる子どもを図書館という場を使って育てていきたい。そんな思いの中で、定時制の学びと出会う体験ができたことをとても感謝しています。それにしても、定時制にも司書がいたらいいのに。すべての学校図書館に、専門性のある専任の司書がいれば学びがもっと豊かになるのになあ。  
(きのした みちこ：埼玉県立浦和第一女子高等学校)